陵

再

:修理事業における三年間

0)

奈良

八県藤

木古墳出

土品

0

国宝奈良県藤ノ木古墳出土品保存 修理事業の概要と対象品

た。

再修理に係る実務は橿原考古学

ジュールに関して計画が立てられ

研究所の企画学芸部学芸課および資

は国 期の三年目が終了した。本稿では、 を開始し、二〇二三年度をもって一 とした再修理が企図された。二期 こで恒久的な保存と展示活用を目的 年による劣化が確認されてきた。そ された藤ノ木古墳の出土品は、 管されている。一九八五年以降発掘 橿原考古学研究所附属博物館にて保 修理事業の概要と三年間の経過につ 定され、二〇二一年度から修理事業 三年計画で出土品全体の修理が予 修理から三十年以上が経過し、 国宝「奈良県藤ノ木古墳出土品 (文化庁) が所有し、奈良県立 初期 経 態に応じた修理を行い、安全に保 により、具体的な修理の工程やスケ 要とされる処置の検討である。 その内容は材質確認と状態評価、必 より本格的な状態調査を開始した。 況確認が行われてきたが、 向けて開始の数年前から対象品の現 作製することである。本修理事業に 管・収納が可能な安定台・保存箱を 存・管理を確保するために、損傷状 が受託者として行うものである。

て報告する。

174 号 第

編集者 発行者 奈良県橿原市畝傍町一番地 清 橿奈 |原考古学研究所 水 康

目

附属博物館展示案内・

アトリウム展示案内・お知らせ

次

二〇二四年八月三〇日発行

橿原神宮の石材とその産地

令和四·五年度共同研究

高松塚古墳をめぐる東西交流

奈良県藤ノ木古墳出土品の 再修理事業における三年間の経過報告

奥 河 田崎

太 者 郎

8

編 中 村 集 健

衣 尚美 6 3 1

品修理検討会の指導を受け、奈良県 より計画され、 品 修理事業は国有文化財等 保存修理事業の一環で文化庁に 河 﨑 国宝藤ノ木古墳出土 衣 (美術工芸 美

はじめに

久年次の対象品 表 1

約一年前

本修理事業の目的はより安全な保

表 1 各年次の対象品				
		初年次(2021年度)	二年次(2022年度)	三年次(2023年度)
本体修理	石棺外	金属製品一括のうち、鉄地金 銅張辻金具14箇分、鉄製模造 品79箇、刀身1口。		鉄地金銅張鞍金具2背分のうち、 前輪・後輪、後輪、金属製品一 括のうち、鉄板鋲飾壺鐙1双、 鉄素環鏡板付轡1箇、鉄地金銅 張杏葉13箇、鉄地金銅張鏡板付轡1箇、鉄地金銅張鏡板付轡残 欠一括、鉄地金銅張雲珠2箇の うち、鉄地金銅張飾金具一括。
	石棺内	銅鏡4面のうち獣帯鏡1面、 画文帯神獣鏡1面、神獣鏡1 面。金属製品一括のうち、金 銅円形飾金具139箇、鉄刀子5 口。	金属製品一括のうち、金銅冠 1 箇、金銅履 2 対、金銅筒形品 1 箇、金銅筒形品 1 筋品 4 対より脱落した歩揺、ガラス製品一括のうち、ガラス小玉4122箇。	ガラス製品一括のうち、ガラス 小玉4122箇。
安定台座・箱	石棺外	金属製品一括のうち 鉄製模造 品79箇、鉄地金銅張辻金具14 箇分のうち6箇、刀身1口。	金属製品一括のうち、鉄地金銅張 辻金具8箇。	
	石棺内	金属製品一括のうち 金銅円形 飾金具139箇、金銅冠 1 箇・履 2 対・金銅筒形品 1 箇・金銅 半筒形品より脱落した歩揺。 銅鏡 4 面のうち獣帯鏡 1 面、 画文帯神獣鏡 1 面、神獣鏡 1 面。	金属製品一括のうち、鉄刀子5口。	金属製品一括のうち、金銅履 2 対、金銅冠 1 箇、金銅筒形品 1 箇。

年次の対象品を表1に示す。料課が中心となって進めている。

各

修理の工程を表2に示す。

事前調

本体修理の工程と方法

表2 修理の工程

事前調査	写真撮影
	構造調査 (透過 X 線撮影)
	状態観察と記録作成
本体修理	クリーニング
	(ドライ、有機溶剤使用)
	樹脂強化
	既存接合修正・新規接合
	充填・補強
事後調査	写真撮影
	透過X線撮影
	記録作成
	三次元形状記録作成
安定台・保存箱作製	

がないこと、仕上がり、作業性、安り可逆性を担保した処置を行うことり可逆性を担保した処置を行うこととした。使用する修復材料は可逆性を担保した処置を行うことのでは、可能な限理を見据え、今回新たに接合や強化、

録作成、 補強を行った。 存接合箇所の修正・新規接合、 樹脂強化を中心に、 X線撮影、 本体修理、 X線撮影)、 査として写真撮影、 本体修理では、 安定台・保存箱作製を行っ 記録作成、 修理後の写真撮影、透過 状態観察と記録作成、 後世の再検討や再修 構造調査 必要に応じて既 クリーニングと 三次元形状記 充填・ (透過





写真 3 三年次(2023年度)修理・ 鉄板鋲飾壺鐙 上:修理前、下:修理後 幅19.6cm、高さ30.8cm



写真 1 初年次(2021年度)修理・鉄地金銅張辻金具 右:修理前、左:修理後 長さ8.8cm、幅6.5cm

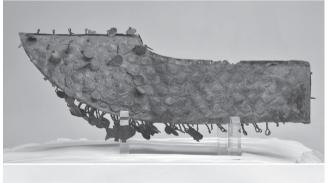




写真 2 二年次(2022年度)修理・金銅履 上:修理前、下:修理後 長さ39.2cm、高さ14.8cm

では、 で脱塩の必要性や処置方法を検討す 方法に関する試験、 に入る前には各処置に用いる材料や ることが可能となった。 材料の分析等を実施した。錆の分析 全性等を考慮した。 錆の種類を明らかにすること なお、 錆や既存の修理 修理作業

四 おわりに

に実行することで、藤ノ木古墳出土 年間続く本修理事業を安全かつ確実 年次の修理対象品の一部は附属 今後十 順次展

品を将来へつなぐ礎としたい。 示活用が計画されている。 博物館にて展示されており、

られると思った。

橿原神宮の石材とその産地

奥

はじめに

いる。 た、 の事業が始まり、 正一五年(一九二六)から神域拡幅 社に列せられるとある。その後、 賜され、翌年の明治二三年(一八九 内侍所 明治二二年に社殿として京都御所の ○) 一月に移築が完了している。 記録によれば、 同年三月に社号橿原神宮官幣大 の皇紀二六〇〇年に完了して (賢所)と神嘉殿の二棟が下 昭和一五年(一九 橿原神宮の造営は 大 ま

とだろう。 所内に建立された建物である。 現在の本殿に転用されている賢所 安政二年 |原神宮の造営や神域拡幅事業に 付近の多くの人々が関わったこ その話の中に大官大寺の (一八五五) に京都御 会いに行く必要もないだろうと思っ

た。 あり、 についても一部であるが観察でき 拡幅工事により使用されている石材 を観察する機会を得た。また、 ていた。文華殿改修工事の折、 方々の御配慮により、 検証できないだろうかと思っ 本殿の石材 神域 神宮

5 菅谷文則氏によるものである。 材の形と石種と岩相が判ればどこか に会いに行くか」と、 て運んだ』と言う人がいる。その人 の心礎を橿原神宮の本殿の礎石とし の話をしていた時、 原考古学研究所の元所長であった故 大官大寺の礎石のこと この話は橿 運ばれた石か推測ができるため、 「『大官大寺の塔 言われた。石 何か

> 別の新聞記者に「橿原神宮の手水鉢 製の方形の板石が数石あった。また、

礎石と植山古墳の石に関係する話が \mathbb{H} 尚 川流域の細川付近や飛鳥川流域の稲 岩製や斑糲岩製で、 跡には礎石の抜き取り穴があるのみ であった。回廊跡の礎石は石英閃緑 跡にのみ礎石がみられた。 査はこの話を聞く以前にあり、

た某新聞記者に「植山古墳の石材が 町で植山古墳の発掘調査がされてい 渕付近にみられる石であった。 本殿脇に結晶片岩 に行こう」と、 この隣にある神社境内にあるから見 た頃、この調査の取材に来られてい 植山古墳の石のこと 誘われた。この社の (阿田付近の石) 橿原市五条野

仕で作業に行っているから生きてお 時の作業であれば私の母親も勤労奉 れた人であれば一○○歳を遥かに超 本殿の造営は今から一〇〇年程 その作業に従事さ 昭和の 時期にあたるのか分からないです」 に造営があり、この手水鉢がいつの また、この石種は石英閃緑岩で、岩 古墳の石材であれば天井石となる。 勾玉状の自然石で、 と話された。 相的に飛鳥の細川から岡寺にかけて 南神門前の石は扁平な 大きさから植

していることになる。また、

前のことであり、

大官大寺の金堂と塔と回廊跡の調 明日香村の冬野 金堂や塔 回廊 り橿原神宮まで運んだ」とすれ を手水鉢に加工し、 伝承と一致すると思っていた。 大淀町の出口などに石屋があった。 法寺町)、桜井市の桜井、同市の出 には、五条野や妙法寺(現在の南妙 の付近の石と推定される。明治の頃 五条野の石屋が植山古墳の天井石 村人の協力によ

雲

れているのかと思い、 基壇材を観察でき、 0 居の石材等にどのような石が使用さ に外拝殿と南神門の基壇の石材、 ことになった。また、今回の見学中 ていた考えにまとまりがつけられる いたが、今回、 石材も観察した。 以上のような状況が長らく続いて 本殿の礎石と本殿の 中途半端となっ それらの一部

= 本殿の石材

石材の一部を観察した。 いる礎石の一部、 本殿付近では、 本殿に使用され 本殿周 囲 0 基壇

宮司様に尋ねると「南神門の前にあ

行こう」と、誘われた。橿原神宮で と言われる人がいる。その石を見に にするために植山古墳の石を運んだ

る石が手水鉢であると言われていま 橿原神宮は明治と昭和の二時期 本殿の礎石 本殿の床下は建物を支

す。

える柱礎石と床を支える束礎石が整光を頼りに中央にある八角形の柱が立つ礎石まで束礎石を観察しながら足を進めた。礎石の上表面は付着物に覆われており、石種の同定が不能であるものが多くあった。石材の観察結果を礎石の石種とした。礎の観察結果を礎石の石種とした。礎のの観察結果を礎石の石種とした。礎のであるものが多くあった。石材の観察ができる部分を捜し、その部分での観察結果を礎石の石種とその産地についてがる。

東礎石は径が二尺程であった。 一様石は川原石のような表面が滑ら が一円みをもつものは見られず、鋭 がで円みをもつものは見られず、鋭 がで円みをもつものは見られず、鋭 がで円みをもつものは見られず、鋭 がで円みをもつものは見られず、鋭

である。 礎石は方形で、上面が平坦である。 生面に丸鑿による加工痕が筋状に残り、側面は割った面そのままで、矢 穴跡が上部に残る。矢穴跡の底には 無粒の物質が溜まり、矢穴の底部の 様子を観察できるものはごくわずか である。

ま礎石として使用した。柱の底が平った大きさの方形の石材が取れるよいた大きさの方形の石材が取れるよいた大きさの方形の石材が取れるよいた大きさの方形の石材が取れるよいでは、では、では、、では、、では、、で、

世であるためにこれに合うように礎石の上面が平坦に加工されたのだろう。見えない部分に使用する石材であるために表面を滑らかに加工する必要がない。また、同じような大きさの石造品を多量に製作する当時の加工方法の一つだろう。

石材に残る矢穴跡は上面を平坦に 石材に残る矢穴跡は上面を平坦に加工し、必要となる面を平坦に加工 中割、小割と矢を入れて割る。目的 とした寸法に合うように割った面を とした寸法に合うように割った面を か工し、必要となる面を平坦に加工 する。しかし、これらの礎石は、柱 を乗せる上面を平に粗加工し、礎石 の寸法に応じた大きさになるように

安穴跡は江戸時代後期頃の形状を と、この礎石は江戸時代後期頃に といことから、表面の形状は礎石を ないことから、表面の形状は礎石を ないことから、表面の形状は礎石を ないことから、表面の形状は砂石を ないことから、表面の形状は砂石を

して大文字山から琵琶町にかけての と の 岩相の一部に似ている。採石地と の 岩相の一部に似ている。採石地と の 岩相の一部に似ている。採石地と いる は 製造 は いっぱい は いま にんけい のいま いっぱい は いま いっぱい は い

基壇部は延石のみであったが、

移築

以上のことから移築される建物の

様に丁寧な加工が施されている。岩や斑糲岩が使用され、天端石と同

 た。
 みられず、平坦に加工されたな作する当時の
 れている。これらの石材には、

 がに加工する
 隅付近の基壇材を観察した。

 はような大き
 羽目石の上に細長い天端石が、

 されたのだろ
 付近の石材
 本殿南側入口である。

西西

|側の

白川

様々で、一石ずつ合わせて並べられ る。 羽目石の上に細長い天端石が乗せら 隅付近の基壇材を観察した。 である。 石)、斑糲岩(明日香村栢森付近の石) 石英閃緑岩 同質の石材である。 石は観察される限り黒雲母花崗岩 ている。 みられず、平坦に加工された石であ れている。これらの石材には鑿跡が (白川付近の石)で、 羽目石は接合面が垂直や斜めと 地覆石はみられない。 (明日香村細川 下部の羽目石は 本殿の礎石と 元付近の 基壇は 天端

に 本殿付近の石材について 本殿の礎石と基壇の天端石に黒雲母花崗岩に 両者の加工の様子をみれば、礎石は製 上面が粗加工で、周囲に矢穴跡が残上面が粗加工で、周囲に矢穴跡が残上面が割面である。しかし、本 り、側面が割面である。しかし、本 かに加工されている。場所に応じて かに加工されている。場所に応じて 本殿付近の石材について 本殿の礎

後の建物には高い基壇を伴うものと ると推測される。また、 再加工して補充したことを示してい となるもののみで、 ら運んだ石材は礎石と基壇の天端 効率的だったのだろう。「大官大寺 がある寺院跡の塔や金堂の礎石が採 量の石を必要とするため、 くにある石が使用された。一度に多 するために羽目石が必要になり、 分に使用する石は大官大寺の礎石を の礎石を運んだ」との話は、 に集められたものを再利用する方が 石を集めるよりも寺院の石材のよう イトのような火薬がない時期であ 露岩を掘削して割るためのダイナマ 石され加工された。明治二〇年頃は、 山地まで行き、各地に転在する 羽目石となる部 伝承され 大きな 京都 近

外拝殿基壇の石材

いる話の時期は明治と考えられる。

Ξ

(表) では、 (本) が、近年は北側に変わっている。 たが、近年は北側に変わっている。 たが、近年は北側に変わっている。 たが、近年は北側に変わっている。 たが、近年は北側に変わっている。

羽目石は飛鳥地方に産する石英閃緑

る。石材の石種はほぼ同質の片麻状 工された平坦な石が使用されてい 壇は壇上積基壇で、 広い石段が取り付いている。この基 近の石)である 斑状黒雲母花崗岩 外拝殿の正面は高い基壇で、 (木津川市加茂付 全て長方形に加 幅 0 大きなものとなっている。

四 南神門基壇等の石材

近の石)である。

である。 状斑状黒雲母花崗岩(加茂付近の石) な石である。 広い石段が取り付いている。基壇上 面の敷石は長方形に加工された平坦 入口となる門で、 石材が使用され、その石種が片麻 南 神門は南側 階段と基壇はほぼ同質 (深田池側) 壇上積基壇に幅が からの

種が片麻状斑状黒雲母花崗岩 門脇にある礎石と地覆石を観察し 基礎に礎石と地覆石が並ぶ。 付近の石)である た。石材は方形に加工され、 門の左右にある築地塀は木製で、 西側の その石 (加茂

<u>Ŧ.</u> 旧手水鉢の石材

付近の上部に径が五四程の孔があ がおかれている。この石の東側中央 が 一七七㎝の勾玉状で扁平な自然石 神門前西側に長さ二八〇四、 幅

> ŋ が

られ、 用されていた石とされている。また、 る。 逆さにして置かれているようにな る。 る。この石種は石英閃緑岩 橿原市五条野町の古老が話された 不明である。この石は旧手水鉢に使 する。下部は埋もれており、 いる石に相当するものと考えられ 「植山古墳から運んだ石」とされて これを排水孔とすれば手水鉢を 表面には層状剥離が部分的にみ 山地に転在する石の様相を呈 (岡寺付 形状が

(六五六)の「狂心の渠」に関係す展示)がある。酒船石は斉明二年 る石造物、 石 跡苑池南池から出土した流水施設の 石造物に明日香村の酒船石、 このような扁平な石で、 (橿原考古学研究所附属博物館に 植山古墳の西側石室は推 同質材の 飛鳥京

伝承を否定する要素はみられない。 相と形状から植山古墳西側の石室材 石は全てなくなっており、 定されている。 古天皇(六二八年没)の初葬墓と推 を手水鉢として橿原神宮に運ばれた 調査時、 石室の天井 石材の岩

洗所」と続く参道脇の建物内に手水 ;ある。この鳥瞰図に一の鳥居を潜 明治四二年製の「橿原神宮の図 、鏡池の橋を渡り、左手にある「手

鉢が置かれている。この手水鉢が現

在南神門前西側に逆さに置かれてい る手水鉢と推定される。

六 鳥居の石材

茂付近の石)である。 鳥居は木製で、基礎に石材が使用さ る。このような石は平成になってか ている礫は茶褐色のガラス質岩であ ている。このコンクリートに含まれ 合わせ部はコンクリートで充填され 石種は片麻状斑状黒雲母花崗岩 せて饅頭形に加工されている。この れている。基礎石は四石を組み合わ 南側の参道にある一の鳥居と二の 基礎石の噛み 加

される。 修された時に使用された資材と推定 るようになった石である。 ら各地の園芸店や資材店で販売され 近年、 改

七 おわりに

うである 石種の関係についてみれば、 各建物等に伴う石材の使用箇所と 次のよ

本殿の石材

礎石: 黒雲母花崗岩 (白川 対近の

基壇 天端石が黒雲母花崗岩 糲岩 英閃緑岩 川付近の石) (飛鳥付近の石)・石 (飛鳥付近の石 羽目石が斑 台

外拝殿の石材

敷石:片麻状斑状黒雲母花崗岩

加茂付近の石

基壇 葛石・羽目石・地覆石が片 麻状斑状黒雲母花崗岩 加

茂付近の石

階段:耳石・踏石が片麻状斑状黒 雲母花崗岩(加茂付近の石)

南神門の石材

敷石:片麻状斑状黒雲母花崗岩

加茂付近の石

基壇 葛石・羽目石・地覆石が片 麻状斑状黒雲母花崗岩 加

茂付近の石

階段:耳石・踏石が片麻状斑 雲母花崗岩(加茂付近の石 状黒

旧手水鉢の石材

石英閃緑岩(岡寺付近の石

の鳥居の石材

基礎石が片麻状斑状黒雲母花崗岩

(加茂付近の石

一の鳥居の石材

基礎石が片麻状斑状黒雲母花崗岩 (加茂付近の石

いる。 羽目石に飛鳥付近の石が使用されて 付近の石、 石と本殿周囲の基壇の天端石に白川 ら移築された明治時代の本殿には礎 使用時期と石種の関係 また、 同基壇の天端石を支える 旧手水鉢も飛鳥付近の 京都御 所

6)

石である。

中域拡幅と整備がされた大正末から昭和にかけての外拝殿と南神門および鳥居の石材が加茂付近の石で、多量に使用されている。しかし、当影付近の石は一石もみられない。 よって、本殿の石材を観察できたよって、本殿の石材を観察できたとにより、本殿の石材を観察できた。

石」である。 基壇の石も「本殿の礎石が運ばれ、加工されたのであれ 像石が運ばれ、加工されたのであれ

植山古墳の石を手水鉢に運んだこ

○時の様子が伝承として伝わっていの時の様子が伝承として伝わっていい
 ○時の様子が伝承として伝わっていい
 ○時の様子が伝承として伝わっている
 ○時の様子が伝承として伝わっている

謝辞

るのだろう。

付近の石が使用されており、この部できない。本殿基壇の羽目石に飛鳥

せていただきます。世話になりました。記して御礼とさかは保存事務所の方々にお奈良県文化財保存事務所の方々におっての福宜様を始めとする多くの方々、

令和四·五年度共同研究

高松塚古墳をめぐる東西交流

中村健太郎

はじめに

ついて報告するものである。
ついて報告するものである。
のいて報告するものである。
のいて報告するものである。
のいて報告するものである。

| 二.共同研究1の成果

高松塚古墳の出土品は、鏡・大刀高松塚古墳の出土品は、鏡・大刀を乗り、玉類などを除くと、残りは全て木棺関係遺物である。木棺関係遺物では、木棺に取り付けられていた物には、木棺に取り付けられていた金銅製透彫飾金具一点、金銅製円形金具六点のほか、銅釘や多数の木棺残片がある。

活動としては、橿原考古学研

付け、黒漆塗りで仕上げた漆塗木棺である。表面は金銅製の金具で飾られ、内面は一面に朱が塗られている。それが金箔を押した棺台の上に安置されていた。木棺の復元的研究は、されていた。木棺の復元的研究は、された痕跡の検討をはじめとする多された痕跡の検討をはじめとする多された痕跡の検討をはじめとする多さながらも設計図を作成できる水準にまで進んでいる。

て制作した。

ザーが参加した。 東京文化財研究所保存科学研究セン 東京文化財研究所にお願いした(肩書は いずれも令和五年度末当時)。研究 いずれも令和五年度末当時)。研究 ががらは 岡林孝作・学芸アドバイ 東京文化財研究所保存科学研究セン

で制作をおこなった。

「根」はそれを踏まえて以下の工程はは確定させ、再現を担当した(株)はは確定させ、再現を担当した(株)はは確定させ、再現を担当した(株)は、議を重ねた。令和4年9月に仕様をはは確定させ、再現を担当した(株)は、

スギ材に、漆で固めながら布を貼り

木棺は、銅釘を使って組み立てた

組み手) 二・二四前後のスギ板を組み合わせ、 工程① 棺蓋も「相欠き」(相互の凸部 組み手)の数が合わせて六枚)とし、 棺身を「六枚組み」(相互の凸部 (= の技法が使われている。実験では、 わせて頑丈に接合する「組み手継ぎ 部に交互に作り出した凹凸を組み合 小口板の角部分の接合には、 の集成材を使用した。 歪みを防止するため、厚さ一・六四 使用したと考えられるが、 はムク材 銅釘で釘付けしたものである。本来 木工 木棺は厚さ一・四 の数が合わせて二枚) (天然のままの一枚板)を 棺身の側板と 実験では 板の端

二回繰り返している。
こ回繰り返している。
「回繰り返している。下地は、木材の上に程を経ている。下地は、木材の上に程を経ている。下地は、木材の上に程を経ている。下地は、木材の上に

工程②

漆工 (下地)

木棺表面

. の

工 程 ③ 多くの事例があり、 を塗って仕上げた。 鉛白を下塗りした上に、朱 げであるが、 やに仕上げた。外面は黒漆塗り仕上 のようなものであったかは議論が分 つやを失い、本来の表面のつやがど 整する。 るとともに、 伝統といえる。 かれた。試験塗りをもとに検討を重 て仕上げる。 に、精製した黒漆を五回重ね塗りし やすり」で研ぎ、 最終的にはやや押さえ気味のつ 出土した木棺断片の表面は 漆工(仕上げ) 最終的な「つや」を調 内面は白色原料である 漆を塗るごとに細かい 表面を平滑にす 古墳時代以来の 内面の朱塗りは 下地の上 (水銀朱)

工程④ 金工 漆塗木棺には各種の体の組み立てには銅釘が使用されている。これらの金具類は、奈文研が作成した実物の三次元計測データをもとに、歪みなどを補正して3Dプもとに、歪みなどを補正して3Dプ

型取りして鋳造した。飾金具類は金がりとなった。

工程(5)

金具取り付け

漆工完了後

銅)。 ŋ 型に行き渡るよう錫を混ぜた(青 三本の小釘で打ち付ける。実験では 広げる(かしめ留め)。さらにその に木棺に孔を開け、 に取り付けた円形金具が棺身に接触 硬いため、かしめ留めには限界があ 軸棒を鋳造する際、溶かした銅が鋳 部分を隠すために金銅製円形金具を 側で先端を銅製座金具に通して叩き 通した軸棒を外側から差し込み、内 具・金銅製六花形座金具中央の孔に 蓋が閉じないというアクシデン 課題が残った。また、棺蓋内面 しかし、青銅は純銅に比べて 金銅製透彫飾金

と、、 これのである。 とせたものである。

> 狭間を表現した。 の石製棺台などを参考に、 六六四、高さ一七四の扁平な箱形で、 触痕跡が残されていた。 設置痕跡があり、 棺台の制作 にあたり、大阪府太子町御嶺山古墳 箔押しであった可能性が高い。 箔が付着することなどから表面は金 木棺床面に転写されたとみられる金 していないが、長さ二一七四、 棺台には、 東壁に盗掘時の接 残片は出土 石槨床面に 四面に格 制作 幅

馬時代の東西交流の所産であり、木鳥時代の東西交流の所産であり、木工・漆工・金工など当時の最先端技工・漆工・金工など当時の最先端技工・漆工・金工など当時の最先端技工・なる。この木棺を、令和五年一二月える。この木棺を、令和五年一二月たる。として、附属博物館で公務塗木棺」として、附属博物館で公務塗木棺」として、附属博物館で公開した。

三. 共同研究2の成果

高松塚古墳の極彩色壁画の発見から五〇年以上が経過し、考古学をはら五〇年以上が経過し、考古学をはら五〇年以上が経過し、考古学をはで、東西交流の視点から壁画の価値で、東西交流の視点から壁画の価値を見直すという趣旨で研究を進め、

按 | はないだろうか。 | のような試みは、おそらく初めてで

メンバーは、外部研究者として影山悦子・名古屋大学准教授、増記隆山悦子・名古屋大学准教授、齊藤茂雄・帝京大学文化財研究所講師にお願いした。研究所からは川上洋一・副所長、中村健太郎・主任企画員が参加した。また、森安孝夫・大阪大学名誉教授、吉田豊・京都大学名誉教授にアドバイザーに就任いただき、多岐にわたるご助言をいただいた。

研で講演会を開催し、 たちで、令和六年三月二〇日に橿考 現地調査した。それらを総括するか ザーからの助言をもとに各自のテー 物の観察調査を行った。また、 自 を訪問し、 マについて議論を深めた。また、 〜三回の研究会を実施し、 おいて、修理作業が終了した壁画 き、高松塚古墳壁画仮設修理施設に ○日に文化庁のご高配をいただ の研究成果を発表した。 五年一〇月に中国・西安及び敦煌 活動としては、令和四 唐代の壁画や出土遺物を メンバーが各 年 アドバイ 年二 令 月

○齊藤茂雄『高松塚古墳の時代の

歴史状況を大掴みに解説した。「ユー高松塚の時代のユーラシア東部の

次々と書き換えられている。 年、中国史や周辺の諸民族の歴史が のである。この考え方をもとに、近 が活躍する歴史の舞台を設定するも 中国と相互に影響関係をもつ諸民族 ジア」よりもカバーする範囲は広く、 るようになった用語である。 ラシア東部」とは、近年よく使われ 「中国とその近隣世界」ではあるが、 「東ア

○中村健太郎 『高松塚古墳壁画の男 ポロをめぐる東西交流の視点か 子群像の杖状の持物について-

鳥時代の高松塚壁画に描かれたこと から唐へ、そして日本に伝わり、 ら眺めることで、ポロが中央アジア の持物を、ポロのマレットとする見 なく、広くユーラシア東部の視点か 本という狭い枠に閉じ込めるのでは 解を明らかにした。高松塚壁画を日 ○川上洋一『高松塚古墳壁画の蓋に 西壁の男子群像の人物が持つ杖状 実証的に浮かび上がらせた。 飛

時代の唐で流行したモチーフだけで ことを示した。つまり、 代の壁画に描かれるモチーフである し、蓋が高松塚よりも古い南北朝時 注目した。中国の壁画と比較検討 東壁の男子群像の人物が持つ蓋に 高松塚と同 はないだろうか。

ついて

なく、より古いモチーフが、)増記隆介『高松塚古墳壁画のある 『の中で混在していたことになる。 日本絵画史―五十年の研究史を ふりかえって--同じ壁

えたその提言は、我々も含め、高松 警鐘を鳴らした。自身の経験も踏ま 日本絵画史を概観した。その上で、 と、「ある」時代の二つの側面から、 塚壁画の研究に関わる者すべてが重 お、十分に検証されていないことに 高松塚壁画の価値がいまに至るもな 高松塚古墳壁画が「ない」時代

といえば、ペルシアに由来する文様 出土遺物の事例を豊富に示しつつ議 解を、より深めることができるので は、連珠文についてのこれまでの理 であることが知られていたが、我々 論を展開した。高松塚壁画の連珠文 テーマに、広くソグドや中国の壁画、)影山悦子『高松塚古墳壁画の蓋の 蓋の連珠文錦をめぐる東西交流を 連珠文錦について』

四 おわりに

究がさらに進み、その価値が広く再 りも広い視野から、高松塚古墳の研 今回の共同研究を機に、今までよ

面をも有しています。

申し上げる。 いただいた関係各位に心より感謝を 最後になったが、 本事業にご協力

認識されることを期待したい。

附属博物館展示案内

秋季特別展 甲

会期:令和六年一〇月五日(土 -古墳時代の武威と技術--

古墳時代には、 ~一二月一日(日 ヤマト王権によっ

く受け止めるべきであろう。

島からの渡来工人の掌握を背景とし の最新かつ高度な技術をもつ朝鮮半 す。大量の鉄素材と、 りわけ高度な製作技術を必要としま こうしたなか、鉄製の武器・甲冑は 割を果たしたことを示すものです。 められていきます。倭王武の上表文 れたと考えられてきました。 てヤマト王権の下、一元的に生産さ 飛躍的な発展を遂げていきます。 は、政治的な統合に軍事が重要な役 て日本列島各地の政治的な統合が進 複雑な立体構造をもつ甲冑は、と 鋲留技法など

> 中心に展示しています。 日 考研の保存科学三〇年』を九月二七 ムページなどで公開しています。 (金) まで開催中です。 詳細はホー 研究所一階アトリウムでパネルを 今回は『橿

お知らせ

葬者の社会階層を示す威信財的な側 それを所持し墓に副葬することで被 甲冑は戦闘の道具であると同時に、 よるものです。 米川仁一・東田浩の人事異動は役職 定年制度の導入および再任用制度に 前号の「ひとの動き」に掲載した

各地の良好な出土例を多数展示し、 といった問題に迫ります。 その変遷を通観し、 ついて、奈良県の出土品とともに、 王権から各地有力者への配布・授受 本展覧会では、古墳時代の甲冑に 製作技術、 、生産、

【研究講座】各回一三時~橿考研講堂 一〇月二〇日、 一一月一〇日

【列品解説】各回一〇時三〇分~ 一〇月一九日、 一月二日

一一月二四日

一一月一六日

【関連講演会】 一〇月一三日 日三三

大阪市住吉区区民センター 時~

アトリウム展示案内